

氏名	中村恭子
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第284号
学位授与年月日	平成22年3月25日
学位論文等題目	〈作品〉「生殖の線」シリーズ 〈論文〉ランの解剖学—ランとイメージの創造性

論文等審査委員

(主査)	東京芸術大学	准教授（美術学部）	齋藤典彦
(論文第1副査)	〃	教授（〃）	佐藤道信
(作品第1副査)	〃	准教授（〃）	植田一穂
(副査)	〃	教授（〃）	関出
(〃)	神戸大学	〃	郡司幸夫
(〃)	京都造形大学	〃	銅金裕司

(論文内容の要旨)

生命はその誕生の初期から、異なるもの同士が出会い、互いに影響し合いながら思いもよらぬ性質のものへと変質してゆくことで、様々な環境に適応し生育することを可能にしてきた。こうした生命の本質的な側面は、理論生命科学や生物の哲学などにおいて生命の持つ「創発性」と表現され、現在同分野において積極的に研究が行われている。しかし、それが絵画という形で表現された事例はない。自然と人間との調和が重要視されるようになった昨今、生命の持つ本質を改めて見直すことに大きな意義があることに疑問の余地はない。生命の創発性を理論的に理解することは容易とは言いにくい。一方で、こうした生命起源にもつながる根本的な創造のあり様を絵画として端的に具現化することが可能ならば、その作品はこれを広く啓発できるであろうと考えられる。

ラン科植物は野生において2万5千～3万もの種が記載されており、この驚異的な繁栄は「共生」によって支えられている部分が多い。特にランにはそれぞれの種に固有の花粉媒介者がおり、その関係は非常に特殊化していることが知られている。私はこの花粉交配の現場に着目し、ランと昆虫の関わりを描くことで、生命の思いもよらない能力を獲得する性質、すなわち「創発性」を絵画という次元に変換できると考えた。

本研究の主題であるラン科ハナバチラン属 (*Ophrys*) は、数百種がヨーロッパ地中海地域に自生し、その唇弁が昆虫擬態を思わせる花として知られている。*Ophrys*の受粉は、ある特定の雄バチが花を同種の雌バチと勘違いして偽似交配を行うことによって成功する。雄バチが雌バチに似た花に抱きつくことで頭部に花粉が付着し、次の別の花で再度ハチが騙され、花に抱きつくことで花の雌蕊に花粉が届けられる。本来、縁もゆかりもないランと雄バチの、不思議な営みが構成され、両者が戯れ合いながら互いの「生」の隙間に絡み合うことで新たな性質が引き出される。その関係は常に進化し、また思いがけない異質な存在を取込み合う。このような生物同士で敢えて「隙に付け入る」「隙に遊ぶ」行為がなければ、生命とは進化に対処していくことはできないのだろうと推察できる。端から見たら遊びとも見てとれるこうしたあり様こそが創造のルーツであり、これこそ生命の持つ本質の一つではないかと考えられる。

フランスの哲学者ジル・ドゥルーズは『リゾーム』という論考によりこの性質を説明している。リゾームとは植物学的用語で「根茎」を指す。リゾームは予定調的な性質を持たず、地中において栄養生長を続けるだけの器官である。ドゥルーズも論考の中で、ランとその花の送粉者の関係を例に、両者が

互いに取り込みあいつつ進化してゆく様子をこのリゾームの構造に見立てている。生命とは、ランと昆虫の関係のような、特に因果関係もなく無秩序に出会い、戯れ合いながら互いを取り込み合うリゾーム状の運動であり成長と捉えることができる。制作の第一段階（第一章）ではランと昆虫の関係をドゥルーズのリゾーム状の動態になぞらえ、ランと昆虫が互いの生殖線上で交叉する様を描き出すことを試みた。

第二段階（第二章）では、ランと昆虫の交叉する運動に見られる肌理をおった。そこには、ランと昆虫の生成の現場の、想起と予期に伴う様相の質感が現れている。私はこれをランの栄養と生殖という二つの生長サイクルで捉え、その分離・接合する運動に絵画表現を模索した。そのことで、第一段階で取り組んだ「生殖の線」の、より具体的な生物の営みによる可視化、具現化を試みた。

生命はランと昆虫に見られるように、自分自身の運動に起こる分離を、絶えず同期させ、現在という肌理を絶えず作りつづける。だからこそ自律的な生命であると言え、思いもよらぬ進化（創造）に開かれていると考えられる。第三段階（第三章）では、ランと昆虫が互いの異なる階層性を横断し同期していく営みに、作品を通して人間をも接続する絵画的技法を模索した。

創造とは、環境変化に応答する自然や生命の創発、さらには人為をも意味すると言える。本研究で制作した作品《生殖の線》の主眼は、ランや昆虫を描くことではなく、生命の有り様から予感する新たな事象を描き出すことにある。ここでは日本画を目的とするのではなく、手段として用いており、その目的は、生命の理解の形態を提示する芸術的展開である。その意味において、本研究における「解剖」とは、ランの内部観測であり、作品として繋がる、ランと昆虫の生成モデルにおけるリアリティーである。私は、自らが制作した作品がもはや生命の創造の位相として、それ自体がランに成り代わって生命のように振る舞い、鑑賞者に新たな世界を想起するよう働きかける存在になることを期待した。描き出される徴候を、絵画というモデルを通して体感させ、今日の価値判断における進化を促す創発的な機会とすることが本研究の実践と目的である。

（博士論文審査結果の要旨）

本論文は、ランとハチの擬似交接が、無限とも思えるランの新種を生み出す生殖システムに注目し、生命科学の「創発性」から芸術の「創造性」とその可能性について論考した力作である。

ランは自然種で2万5千から3万種、人工交配でつくられた種も含めると10万種もの種があり、それぞれが固有の花粉運搬者をもつという。筆者がとりあげたラン科ハナバチラン属（*Ophrys*）は、ハチを媒体者とし、雌バチに似た形の花に雄バチが擬似交接することで、花粉の授受が行なわれる。通常、異種間では受精を妨げるシステムが作動するが、ランはその機能が弱いため、誤認して飛来し続けるハチとの“共生”から、無限あるいは無秩序にも思えるランの新種が生み出されるのだという。筆者は、異なるもの同士の交錯が、全く新しいものを生み出すこの「創発性」に、芸術の「創造性」を重ね合わせようとしているのであり、そのプロセスをモデルとして描いたのが、一連の「生殖の線」シリーズである。このシリーズで筆者は、哲学や文学、生命科学、美術史など豊富な知識を駆使し、様々な類似の事象に「創発性」を見出しながら、そのモデルを、抽象化したランとハチの造形として描き出している。

イメージモデルの最初にあげているのが、ドゥルーズの「リゾーム」論である。因果関係をもたないランとハチの擬似交接を、ただひたすらに栄養生長を続ける根茎（リゾーム）から、リゾーム状の運動として捉え、そのランとハチの絡み合いを、「生殖の線ーハナバチ」「同一インセクティブェラ」「同一コトスキー」「同一コリアンテス」などの作品で描いている。

次に筆者があげるのが、運動エネルギーのモデルであり、海面に無数に連なるうねりや小波に、ランとハチの性のサイクルをイメージし、さらにそこから「美」や「独創」を見出す人間精神のサイクルをイメージする。「生殖の線ーカステラーナ」「同一キンラン」「同一キログロティス」では、ランとハチの

交錯を、類似形態のくり返しによる運動サイクルとして描いている。また筆者はここで、ランとハチ、人間の自己と他者の関係を、ジャック・ラカンやジョルジュ・バタイユを引用しながら、両者間のゆらぎと補完作用から読み解き、両者の「隙」に遊ぶことが「創発」につながるのだとする。

第三にあげているのが、当事者の二者に第三者を加えた、「もつれた調和」のモデルである。浮世絵の春画には、しばしばそれをのぞき見る小さな人形のような「豆男」が描かれる。絵の鑑賞者を、画中で代行するようなこのモデルに、筆者は、ランとハチを描いた自作品とそれを見る鑑賞者の関係を重ね、自作品と鑑賞者の間に新たな「創発」が起こることを期待している。「生殖の線ードキュメント」は、そうした三者による「創発」のモデルを描いたものである。

多分野にわたる豊富な専門知識と高い文章力は、理論系の学術論文の観がある。ただ各モデルの論述は、証明よりも視点と発想の展開を意図しているため、学術論文として読むと飛躍が感じられるものの、あくまでも筆者が目指しているのは、サブタイトルにもいう「イメージの創作性」、つまり作者（筆者）と鑑賞者（読者）による「創発性」なのだと言える。優れた学位論文として、査読者の高い評価を得た。

（作品審査結果の要旨）

申請者は修士課程の半ば頃よりランの生態に強い興味を持ち始め、その興味を絵画制作に反映させてきた。修了制作において既にランをモチーフとした絵画制作に取り組んでいる。博士課程に進んでからは「ランの解剖学」をテーマとし、芸術作品が科学だけでは説明しきれない生命の創造性そのものとして表現できないか、自身の芸術作品を通して創造とは何かを美術的に明らかにする事を目的とした研究を進めていった。

研究作品はランの花の形態的特徴をモチーフとし、日本画材を用いて制作されたものである。ランの花はあくまでモチーフであり、申請者にとっての主眼は、その花の形態を描き出すことではない。植物があらゆる外的要因に対応しその形態を変化させ、進化していったように、作品それ自体がランになり変って生命のように振る舞い、鑑賞者に新たな世界を想起させる様働きかける存在になる事である。

揉み紙技法を施した薄い白麻紙の上に、細い緊張感のある線で丹念に書き込まれた画面を見るうちに、鑑賞者の視点は画面の中を彷徨い始め視覚的に様々なイメージを想起させ、まさに申請者の意図とする新たな世界へと迷い込むことになるのである。

また、従来の画家がスケッチ・素描を重ねることで作品の構想を構築していったように、申請者は、言葉や文章を綴ることで作品の構想を発展させていくという。言語的思考による独創的な発想と、絵画表現との相関的な展開を具体化した新たなアプローチも評価された。

他、一連の作品においても素材研究も含め造形的で良質な試みがなされ、今後の新たな展開に期待したい。

審査会においては審査員全員が申請者の一連の作品を高く評価し、学位にふさわしい作品であると判定し合格とした。

（総合審査結果の要旨）

本論文はイメージの飛躍と言葉の疾走がきわめて印象的である。たとえば、申請者は、「美」や「独創」を見出す人間の精神のあり方を、ジャック・ラカンがいう「ラシオー（割合）」という概念による、数学的でパラドクシカルな値として理解するという。「私」を x 、「他人」を y とおき、「私にとっての他人」を y/x 、「世界（みんな）」 $x + y$ 、「世界の中での私」 $x / (x + y)$ 。そして世界を数式 $y/x = x$

／ $(x + y) = a$ としたときの解に含まれる“無理数”として理解する。この世界をそのように表象する点に申請者の思考方法がよく表れている。同様に、この論文では、理想とする「芸術」のかたちを、ある種のランと雄バチとの不思議な営みからイメージされる関係性に仮託し構築を試みる。そのかたちを導き出す視点は、生物学から現代フランス思想、浮世絵などなど多岐にわたり、それら多彩なイメージがちりばめられた文章は知的刺激と示唆にみちている。しかし、申請者ならではの思考の疾走を十全に文章化し、読むものにも通ずる理論として言語化できているとは言いがたい箇所が散見することも事実であり、その点が惜しまれる。

作品についても申請者は、小説から絵画表現における文法を学ぶことが多いという。そして、ランと雄バチを、作者の単なるイメージとして描くのではなく、理想とする精神世界の図解として描き出そうとする。そのことは一連の作品が、まるごと受容されるものとして提示されるよりも、見るものに読解すること、受け入れることを強いる傾向にあることからもうかがえる。とはいえ、見るものがいわゆる絵を見る作法—距離をおき全体を見回す—という見方を捨て、あたかもハチがランの花を這いずり回るように画面を眺めたとき、あるいは作中に豆男となり入りこんだときには思わぬ表情をみせはじめる。岩絵具の粒立ち、刷毛によりできた微細なスジ、執拗に描かれた細い毛描きなどが、ハチとランとの、あるいは見るものと世界とのエロティックな関係—それが申請者のいう“創発性”であり、望む「芸術」の姿—を喚起させるスイッチとして働き出す。ただ、申請者が夢想する作品と観者の創発的な関係性を築くためには、さらなる作品と提示の方法についての模索が図られることが望ましい。

論文、作品ともに申請者の思考のひらめきを十全なかたちで提示しきれず惜しまれるが、博士学位論文・作品としての基準をみたし、新しい芸術の可能性を示すものであるとして、審査委員会では高く評価し、合格とした。